

## 第9回 滋慶リハビリテーション学術研修会

# 「姿勢の重要性について」

我々の日常生活の中で姿勢保持は重要です。姿勢保持機能はねがえり・這い這い・お座りなどの乳児期の運動発達を経て形成されますが、発達障害児では、それらの運動学習が阻害されます。また、一旦形成された姿勢も、パーキンソン病のような後天的に発症する疾患において姿勢異常をきたすと、日常生活では姿勢反射や歩行などに障害が出現します。リハビリテーションはそれらに働きかけ日常生活をしやすいものなのです。

日時

平成 23 年 11 月 23 日（祝）

定員

100 名

午後 1 時 00 分～午後 4 時 30 分  
（受付：12 時 30 分～）

会場

京都医健専門学校

参加費

2,000 円

地下鉄烏丸御池駅 6 番出口より徒歩 3 分  
（烏丸三条西入衣棚町）

## 1 「パーキンソン病患者のリハ効果—姿勢障害へのアプローチ—」

講師：武澤 信夫（京都府リハビリテーション支援センター長）

時間：午後 1 時 10 分～2 時 40 分



パーキンソン病のリハ効果について、統一パーキンソン病評価尺度（UPDRS）と三次元動作解析を用いて身体機能の改善を中心にしたプログラムの有効性を報告してきた。また、PDの進行期では前傾前屈姿勢が形成されていることが多く、抗パーキンソン薬の効果はあまり期待できない。姿勢障害は、歩行障害・ADL 障害を著しく増悪させることにより PD を進行させている可能性があるが、一方ではリハ効果がみられることが多い。

学会等

日本リハビリテーション医学会評議員・近畿地方会幹事

日本神経学会代議員 他

## 2 「発達障害のリハビリテーション；姿勢と機能とこころの関係」

講師：家森 百合子（聖ヨゼフ医療福祉センター前副院長）

時間：午後 2 時 50 分～4 時 20 分



自閉症スペクトラムなどの発達障害児は乳児期早期から向き癖や重心偏移を示し、手口目足の協調運動や寝返り・四つ這いなど四肢体幹の協調を必要とする移動運動に逆転・飛び越し・非対称を示すことが多い。一方、姿勢の悪い部分は機能が悪く、発達が遅れやすく、病気になりやすく、疲れやすい。そのためこころの負担になりやすい。乳幼児期からの早期リハビリテーションは発達障害児の自己肯定感を育て、育児支援としての役割は大きい。

著書等

ミネルヴァ書房 『子どもの姿勢運動発達』

ビデオ『赤ちゃんの1年前編・後編』 他

# 参加申込 F A X

FAX (075) 257-6488

## 第9回 滋慶リハビリテーション学術研修会

日 時 平成23年11月23日(祝)  
午後1時00分～午後4時30分 (受付:12時30分～)

定 員 100名

申込締切日 平成23年10月30日(日)

ふりがな 氏名			
所属先		職種	
住所			
TEL		FAX (必須)	
e-mail (必須)			

※FAX もしくはe-mail のいずれか一方を必ずご記入下さい。

### 申し込み方法

下記 FAX よりお申し込みください。

なお、先着順に受け付けさせていただき定員になり次第、受付を締め切りますので、お早めにお申し込みください。

〒604-8203 京都市中京区三条通室町西入衣棚町 51-2

京都医健専門学校 理学療法科

担当/片桐

FAX (075) 257-6488

TEL (075) 257-6507